

Feel the NCGM Plus



国立研究開発法人
国立国際医療研究センター

NCGM通信

2023.9.19

Vol.8

6月～7月（季刊）



NCGM5階研修棟大会議室で対面での発表が行われ、リモートでも参加できました

6月26日、NCGM連携の会が開催されました

新型コロナウイルスの影響により、4年ぶりに来賓を招聘しての開催となりました。

開会挨拶にて国土典宏理事長は、Newsweek社の独自調査によるランキングにおいて、センター病院がWorld Best Hospitals 2023に世界で73位、日本国内で5位に選出、専門分野においても、センター病院循環器内科、腫瘍診療科、消化器内科、小児科がランクインしたことを紹介しました。

また「日本版CDC」法成立により、新たな感染症危機に備えるために国立感染症研究所とNCGMが統合し、「国立健康危機管理研究機構」が新設されることを紹介しました。これに対し国土理事長は、「新機構においてもこれまでどおり、医療を提供します」と述べました。

来賓挨拶では、東京都医師会 尾崎 治夫会長が「東京都は新型コロナウイルスの感染者数が多かったにも関わらず死亡者数が少なかったのは、NCGMが都内で主導的な役割を果たされたからだと思う。2025年には感染研との合併により感染症危機管理の司令塔となるので、しっかりした体制で導いてほしい」と述べました。

新宿区医師会 平澤 精一会長は「新宿区が全国に先駆けてPCR検査ができる体制を整備、NCGM敷地内に検査スポットを設置した。これはNCGMの先生方がリーダーシップを取った賜物だと思う」と述べました。

その後、次の4つの演題で講演会が行われました。

- ① 脊椎外科、新規開設しました！～低侵襲から高難度まで診療内容のご案内～(松林 嘉孝脊椎外科診療科長)
- ② 消化器内科と連携診療～胆膵疾患を中心に～(山本 夏代消化器内科診療科長)
- ③ 変貌する肺がん薬物療法～肺がんの診断から治療まで～(軒原 浩呼吸器内科医長)
- ④ 最近の肺がん手術の進歩～VATSからロボットへ～(長阪 智呼吸器外科診療科長)

閉会挨拶では、杉山 温人病院長が「新機構設立後も今まで以上に総合医療を推進するにあたり、みなさんの力を借りて期待に応えたい」とコメントしました。



国土理事長



杉山病院長



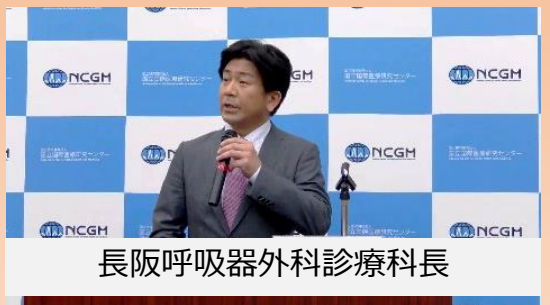
松林脊椎外科診療科長



山本消化器内科診療科長



軒原呼吸器内科医長



長阪呼吸器外科診療科長

センター病院、国際医療協力局、国際感染症センターは、新型コロナウイルス感染症対策への貢献に対し、東京都から感謝状が授与されました

国立国際医療研究センター病院、国際医療協力局、国際感染症センターは東京都の要請に基づき様々な支援活動を行いました。

センター病院は、都立病院への医師派遣のほか、コロナ後遺症やコロナワクチン後遺症に関して対応しました。

また、東京都からの要請に応じて、病院全体で受入体制を構築するなど職員全体で対策にあたりました。

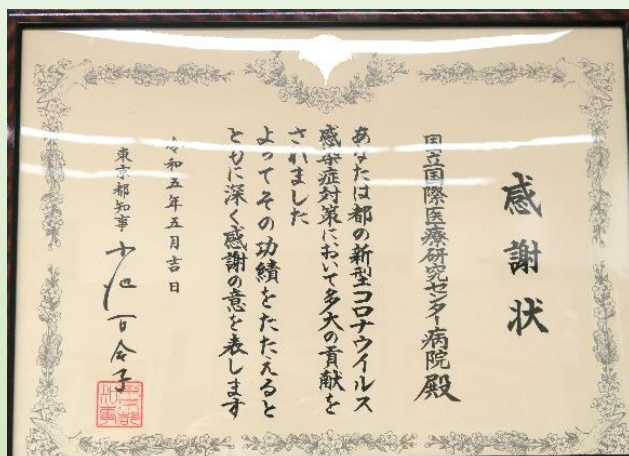
国際医療協力局は、品川プリンスホテルに設けられた「軽症者宿泊療養施設」の立ち上げと運営支援、「医療機能強化型宿泊療養施設」および「高齢者等医療支援型施設」への医師派遣などの支援活動を行いました。

国際感染症センター 国際感染症対策室 森岡 慎一郎医長は、東京都の要請に基づき、「東京都iCDC※」後遺症タスクフォースメンバーとして、専門家会議への参加、セミナーでの講演、啓発資料作成などでの情報発信を積極的に行いました。

また、東京都が主催する都内医療機関向けの新型コロナウイルス感染症診療体制に関する定期会議への出席などにあたりました。

これらの貢献に対し、小池百合子東京都知事から感謝状が授与されました。

※東京感染症対策センター
感染症に関する政策立案、危機管理、調査・分析、情報収集・発信など、効果的な感染症対策を一体的に担う常設の司令塔として設立



6月9日、戦略的イノベーション創造プログラム(SIP)「統合型ヘルスケアシステムの構築」の公募説明会が開催されました



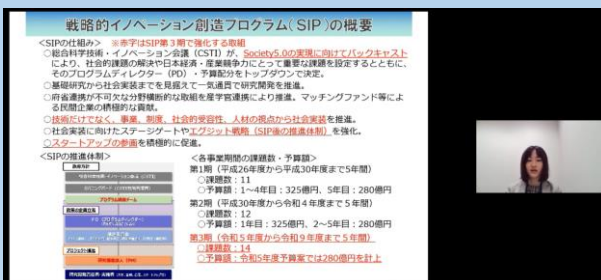
左から山田研究医療部長、武井企画戦略局長、永井良三先生、平山イノベーション専門職

戦略的イノベーション創造プログラム(SIP: エスアイピー)は、内閣府の総合科学技術・イノベーション会議が司令塔となり、科学技術イノベーション実現のために創設した国家プロジェクトです。

本年度から第3期が始まり、設定された14課題のうちの一つ「統合型ヘルスケアシステムの構築」は、自治医科大学 学長の永井良三先生がプログラムディレクターを務められています。

NCGMは本課題の事業の公募、事業支援・マネジメント等を行う研究推進法人として内閣府から指定されました。研究医療部イノベーション推進室がその役割を担っています。

6月1日に本課題の公募を開始し、6月9日に公募説明会がオンラインにて開催されました。内閣府 科学技術・イノベーション推進事務局の赤星里佳参事官補佐(当時)からSIPの概要について、永井先生から、本課題は日本の電子カルテを標準化するための基盤と健康医療情報を時系列で収集するシステムを構築し、疾患の可視化と個別化医療等を可能とし、わが国の医療版Society5.0を推進することが目的であることと、詳細な説明が行われました。説明会の開催後は多くの質問が寄せられており、本課題への関心の高さが伺われています。



SIPの概要について説明する内閣府 赤星参事官補佐(当時)



左から西澤係長、山田研究医療部長、武井企画戦略局長、平山専門職、菅沼室長、中久係員

「統合型ヘルスケアシステムの構築」Webサイト
<https://sip3.ncgm.go.jp/index.html>



7月1日、日本国際保健医療学会第37回東日本地方会大会を開催しました



挨拶する国土典宏理事長



川原尚行医師



リモートで講演する武見参議院議員

熱帯医学・マラリア研究部狩野繁之部長が大会長を務め、標記大会をNCGMで開催しました。

日本国際保健医療学会（jagh）は、国際医療協力局に事務局を置き、グローバルヘルスの向上を目指す一般社団法人です。大会当日は、国土理事長の歓迎挨拶で、同学会とNCGMが協働して活動することの期待が述べられました。

「緊急報告」として、NPO法人ロシナンテスの川原尚行理事長から、スーダンの内戦勃発で、日本に退避した生々しい報告がありました。

「特別講演」は、武見敬三参議院議員に大所高所より、国際貢献とポストコロナの医療制度改革の一体化の必要性を解説いただきました。

日本国際保健医療学会は、日本熱帯医学会と協働してそれぞれの学会のポテンシャルを高めています。本大会では、前者の学生部会jagh-sと後者の学生部会J-Tropsのクロストークを企画。また、両学会の共同official journalであるTrop Med Healthは、大会前日にインパクトファクターが4.5と発表され、大会を盛り上げました。両学会は合同大会を定期的開催し、互いに研鑽することで合意しました。



（左から）
神馬征峰前jagh理事長、狩野大会長、小林潤jagh理事長

NETEC使節団がNCGMを訪問しました

「新興再興感染症に関する教育、研究、患者診療体制構築」を目的とし、2023年2月にネブラスカ大学医療センター（UNMC）と国立国際医療研究センター（NCGM）の間で締結されたMOUの取り組みの一つとして、6月19日（月）、6月20日（火）に米国NETEC(National Emerging Special Pathogens Training and Education Center)からの使節団5名が国際感染症センターを来訪し、日本の感染症対策や取り組みについて紹介・視察、及び情報・意見交換を行いました。また、国土理事長、武井局長への表敬も行いました。

1日目は「COVID-19の振り返りと今後の新興・再興感染症対策」、「国内の訓練・キャパシティビルディング」、「感染症隔離病棟」についての議論を行い、午後は、国際感染症センター新感染症病棟にて、「エボラウイルス病が疑われる患者の搬送及び診療対応のデモンストレーション」、また患者搬送の動線・手段・手順、ならびに新感染症病棟設備等の視察をしました。

2日目は360度カメラを用いた遠隔ビデオ通話を通して、新感染症病棟での「患者の汚物処理訓練」の実施、及びNETECからのフィードバックをいただき、午後は「新興・再興感染症に関する臨床研究」について議論を行いました。

本訪問は、友好的な雰囲気の中で行われ、感染症対策の重要性とグローバルな連携の必要性が再確認されました。



新感染症病棟での訓練の視察



レセプションルームで行われた議論の様子

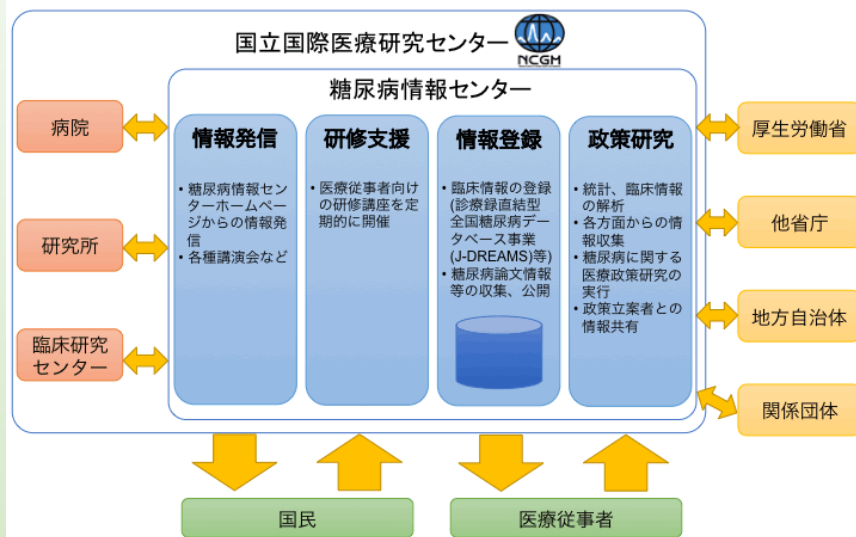


表敬訪問



視察の様子

糖尿病情報センターの概念図



糖尿病情報センターは国レベルでの糖尿病など生活習慣病対策の中核機関として、多岐に渡る活動を行っています。

糖尿病診療の均てん化と糖尿病に関する全国の医療水準の向上をすすめるためには、糖尿病に関する情報の提供および技術的支援を行う体制の整備が望まれます。そのような要請をうけて2008年、糖尿病情報センターがNCGM内に設置されました。当情報センターの果たすべき役割は以下の通りです：

1. 糖尿病の情報発信

ホームページ等を通じて、一般向け、医療従事者向けに行っています。ユーザーフレンドリー・アクセスビリティのある発信を目指し、多様な背景をもつ方に情報が届くよう工夫しています。また、6NCの各情報発信部門と連携し、国民へ向けた望ましい医療情報発信を共有する取り組みを行っています。

2. 研修支援

医療従事者向けの研修講座を定期的に行います。

3. 情報登録

診療録直結型全国糖尿病データベース事業（J-DREAMS）等を通じて、臨床情報の登録を行い、データを分析します。

4. 政策研究

糖尿病に関連する統計、臨床情報の解析を行います。NDB（全国のレセプト情報）を用いた研究を行い、医療計画における指標例の作成や、診療報酬改定、学会ステートメント作成の契機になるなど、様々な形で貢献しています。

（センター長 大杉 満）

研究所部門シリーズ
No.12

肝疾患研究部

肝疾患研究部は、様々な肝臓疾患（ウイルス性、代謝性など）の病態解明と診断・治療法の開発を目指し日々研究を遂行しております。近年、C型慢性肝炎は抗ウイルス剤により完治できる時代となった一方で、B型慢性肝炎や非アルコール性脂肪肝炎など多くの課題が残されています。私たちは各種肝疾患病態に関与する免疫応答、アミノ酸代謝異常、線維化、ゲノムに特に着目し最新の機器・技術を用いて研究を展開しています。更に、国内の多くの大学・研究施設と共同研究を進め、臨床検体や臨床情報を用いた研究に重点を置いています。他大学からの研

究希望者を積極的に受け入れ、国内・海外学会発表や論文作成など精力的に行うことで若手研究者の育成にも取り組んでいます。NCGM内、6NC間での共同研究も進めておりますので、私たちの研究に関心のある皆さまからのご連絡をお待ちしております。

(部長 考藤 達哉)



学会発表のリハーサル風景

研究所部門シリーズ
No.13

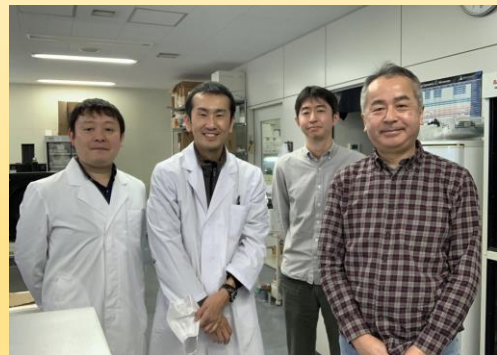
免疫制御研究部

免疫制御研究部では、免疫応答の異常により生じる自己免疫やアレルギー疾患及び免疫不全症の病態形成機構を解析し、制御・修復法の開発を目指しています。

直近のプロジェクトでは、各種炎症や感染における新規サイトカイン産生細胞や好酸球機能の解析、自己免疫疾患群や心血管障害に共通の疾患関連遺伝子と病態形成機構を解析し新たな治療標的の同定を推進しています。また、免疫応答制御に重要な制御性T細胞の分化機構解析からNR4A転写因子群と免疫抑制剤治療や疾患重症度等との関連を明らかにしました。

炎症や感染に限らず予想外の所で免疫系が関わる病態も次々に解明されてきています。思い当たる際は気軽にお声がけください。

(部長 高木 智)



免疫制御研究部メンバー
(飛弾野、関谷、松村、高木)

センター病院診療科 シリーズ No.6

国際感染症センター

総合感染症科では感染症のみならず、様々な内科疾患や感染症疑いと思われる原因不明の疾患をひろく診療しています。スタッフは全員内科診療一般に対応出来る能力を持っています。よって入院患者の診療は総合診療科とともに行い、高齢の方、合併症を抱えた患者さんにも十分に対応できる体制を整えています。そのほか、トラベルクリニックでは海外渡航前の方の健康診断・相談及び黄熱ワクチン等の予防接種を行っています。渡航の規制が緩和され渡航者も増えております。また感染症の治療薬、ワクチンの治験も今後頑張って参ります。私達でお役に立てることがございましたら遠慮なくお声がけ下さい。(DCCセンター長 大曲 貴夫)



DCCメンバー

センター病院診療科 シリーズ No.7

精神科

当科は2020年1月に精神科病棟を休床して以来、主に入院患者に対し、各科からの依頼に応じた診療活動を行っています。相談で多いのはうつ、不安、不眠、せん妄などです。精神科医による診察に加え、状況により精神科リエゾンチームとしても関わっています。リエゾンチームは精神科医、看護師、心理療法士との多職種チームであり、それぞれの得意分野をいかして診療に携わっています。その他、緩和ケアチームにも参画し、認知症ケアチームには当科の医師と心理療法士が属しており、日々各病棟からの相談を受けております。

当科の役割としては各科診療の下支えという部分が大きいです。患者本人の病状だけではなく、患者を取り巻く心理・社会的問題により治療が滞ることも少なくありません。こうした困りごとに対し、患者や家族はもちろんのこと、病棟スタッフまで含めた応援ができるよう心掛けております。今後も各科の診療が円滑に進められるようサポートしてまいります。どうぞよろしくお願い申し上げます。

(精神科診療科長 加藤 温)

研修医の窓

子育てしながらの研修医生活を通して思うこと センター病院 初期臨床研修医2年目・林 繭子

私には来月4歳になる娘がいます。「研修医と子育ての両立は大変だね」と度々お声がけいただきますが、理解溢れる同期やローテーション科の先生方のお陰で現在まで研修を続けることができ非常に感謝しております。社会人が子供を産み育てるにはどこかでキャリアを一時中断するか多少無理しつつも仕事と両立させる必要があります、これは人生のどの段階であっても同様で、「研修医だから大変」というわけではないのでしょう。そして「お迎えがあるから早く帰らないと」と急ぐ男性医師や、私以上に大奮闘しつつ仕事と子育てを両立させる夫を見ると、これがジェンダーレスな負荷であることにも気づかされます。（各家庭で比重はあるでしょうが…。我が家は完全に夫寄りです。）

娘とのコミュニケーションを通して患者さんとのコミュニケーションに活かせるスキルを獲得することもしばしばあり、子育てが研修医生活にとってマイナスばかりではないことも実感しています。私も娘とともに医師として成長していければと思います。今後とも研修医一同のご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願いいたします。



第三教育研修棟の金魚「デパス」と娘

NCGM職員の著書紹介

外傷専門診療ガイドライン JETEC

木村昭夫（編集委員長）救命救急センター長（一社）日本外傷学会 ◆ 監修

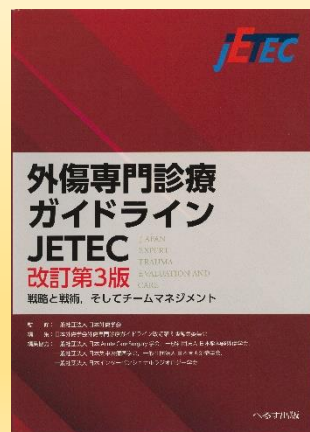
本書は外傷専門医が備えるべき知識をまとめた診療ガイドラインの改訂版です。新規項目の追加でさらに内容が充実しました。穿通性外傷、とくに銃創患者の診療について大幅に加筆など最新動向に沿ってアップデートし

ました。

外傷専門医・外傷専門医を目指す医師のみならず、外傷に携わる医師必携の一冊です。

編集：日本外傷学会外傷専門診療ガイドライン改訂第3版編集委員会

へるす出版
2023年05月第3版



研修医の窓

レジナビに行ってきました！

センター病院 初期臨床研修医1年目・平田 祥太郎

4月に入職してからはや3ヶ月が経ちました。新しい環境や業務にも徐々に慣れてきて、日々充実した研修生活を送っています。

去る6月18日(日)、東京ビッグサイトでレジナビが開催されました。レジナビは全国の医学生を対象に、各病院が初期研修プログラムや病院の魅力を発信する合同説明会です。

今回は、2年目研修医2名と1年目研修医6名がレジナビに参加しました。

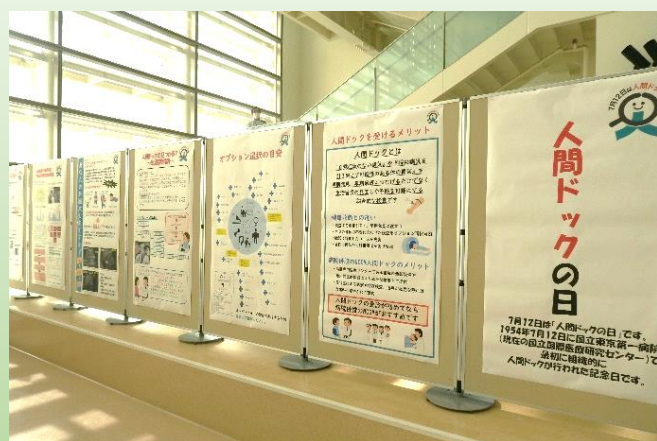
NCGMのブースは大盛況で、用意した200部のパンフレットは開始から3時間ほどで配布終了。

多くの医学生の皆さんに研修の様子や病院の雰囲気についてお伝えすることができました。

レジナビは秋にも開催予定です。今後も当院の魅力を広く発信していきたいと思います！



7月10日～14日に、センター病院で「人間ドックの日」展示を行いました



NCGMの前身である「国立東京第一病院」が、1954年7月12日に日本で初めて全身精密検査を実施しました。この検査が後に「人間ドック」と呼称されました。

これにちなみ、7月12日は「人間ドックの日」と制定されました。

期間中、センター病院中央棟地下1階アトリウムでは、人間ドックを受診するメリット、当人間ドックセンターで実施している検査、人間ドック検査を通じて分かることなどに関するポスターが展示されました。

国際医療協力局グローバルヘルスレポート “規範セッター”という仕事

Vol.2

グローバルファンド（GF）※技術審査委員会 技術評価委員（HIV）
野崎 成功真（医師）

私は小児科での初期研修からずっとNCGMに勤務していますが、当時、HIVの10歳の女の子を救えなかった経験から、国際医療協力局に移籍してからもHIV対策にはこだわりを持っていて、ザンビアでは地方でもHIVの治療が受けられるようにする支援を、ミャンマーではHIVや結核の診断検査の向上などに取り組みました。

こうした国レベルでの活動の経験をより広く活かすため、各国からグローバルファンドへの、HIV・結核・マラリア対策資金の支援要請を技術的見地から審査する技術審査委員(TRP：Technical Review Panel)としても貢献しています。途上国では、3疾患対策資金に占めるグローバルファンドの割合が大きいので、やりがいと共に責任を感じる仕事です。

※和文組織名：世界エイズ・結核・マラリア対策基金

低中所得国の三大疾病対策のために資金を提供する機関として、2002年1月にスイスで設立。国際社会から大規模な資金を調達し、低中所得国が自ら行う三疾病の予防、治療、感染者支援、保健システム強化に資金を提供。

支援の対象は、100以上の国・地域にのぼる。年間拠出額は約30億～40億ドル。グローバルファンド日本委員会ホームページより



ミャンマーでのJICA専門家時代の活動風景

HIVなどの輸血関連感染症の削減のため国立血液センターへの技術支援

国際医療協力局グローバルヘルスレポート “規範セッター”という仕事

Vol.3

WHO本部：妊娠出産と周産期の優先WHO推奨改訂に関するガイドライン
策定委員 他

小原 ひろみ(専門職/医師)

私は、2015年以降、世界保健機関（WHO）の複数のガイドライン策定委員や諮問委員となり、周産期、流産、避妊、新生児領域のWHO推奨・書類の策定・会合実施に技術貢献をしています。

ガイドライン策定委員会では、世界各地の専門家と共に、特定の介入についての「推奨」を決めていきます。具体的には「システムティックレビューに基づく望ましい・望ましくない効果の検討」のみならず、「医療従事者やユーザーの価値感・受容度、必要リソース、公平性、実施可能性等」も検討します。「低中所得国において公平性を損ねないか」について注意が払われるのが日本でのガイドライン作成と異なる点かもしれません。

これらにコメントする際に、低中所得国の母子保健・リプロダクティブヘルス分野の行政・臨床双方の支援経験と産婦人科専門医としての知見が役立っています。

一番やりがいを感じる瞬間は、実際に推奨(例：切迫早産時のステロイド使用等)が、低中所得国での実施・拡大に結び付いた時です。



小原医師が策定に関わったガイドライン

国際感染症危機管理対応推進センター(GIC) 松澤幸正 運営室長がヨルダンのGOARN戦略会議に参加しました

NCGM/DCCでは、WHO、厚生労働省と共同でGOARN (Global Outbreak Alert Response Network) Tier 1.5ワークショップを毎年開催し、日本における感染症人材育成に貢献してきました。今回、2023年5月8日～12日まで、ヨルダン・ハシミテ王国の首都、アンマンにて、GOARN戦略・実施ワークショップ (Strategy Implementation Workshop)、及び第33回GOARN運営委員会 (Steering Committee) が開催され、DCC/国際感染症危機管理対応推進センター (GIC) の松澤

幸正 運営室長が派遣されました。会議では、GOARN戦略に関する議論、他のパートナー機関との情報共有等が行われ、WHO西太平洋地域への支援、また、GOARNへの更なる貢献に資する知見を深める機会となりました。

今後も、WHO、厚生労働省とともに、GOARNの枠組みを通して、国際支援、感染症人材育成に貢献してまいります。



このだい
通信

国府台病院心療内科 河合診療科長が日本心理医療諸学会連合の理事長に就任しました

日本心理医療諸学会連合 (UPM : The Japanese Union of Associations for Psychomedical Therapy) は、医学系諸学会と心理学系諸学会の学際的な連合体として1987年に設立されました。現在15学会※で構成され、心理学系学会と医療系学会がお互いにその学問的特色を尊重し、相互理解

と総合的發展を図ることを目的として活動をしています。

河合診療科長は「学際的な研究の發展、社会に向けての情報発信、学会相互の交流などに力を注ぎたい」と話しています。



河合科長

※日本心療内科学会、日本行動医学会、日本カウンセリング学会、日本健康心理学会、日本認知・行動療法学会、日本交流分析学会、日本自律訓練学会、日本心身医学会、日本バイオフィードバック学会、日本歯科心身医学会、日本内観学会、日本女性心身医学会、日本実存療法学会、日本ストレス学会、日本ヨーガ療法学会

オンラインスポーツイベント～心つながるラグッパ体操！～

(寄稿) センター病院小児科子どもの療養環境に関するWG一同



長期入院中の子どもたちへのスポーツ活動を企画運営されている『認定NPO法人Being ALIVE Japan』を通じて、元リコーブラックラムズ東京の赤堀 龍秀選手、元クボタスピアーズ・現千里馬クラブの稲橋 良太選手とのオンラインスポーツイベントが6階東病棟「森のぷれいるーむ」で開催されました。

選手たちから直々に教えていただいた「ラグッパ体操」は、座った姿勢でも、立った姿勢でも楽しむことのできる全身を使った体操です。

ラグビーのさまざまな動きが盛り込まれている「ラグッパ体操」を通して、「ハカ」や「トライ」など実際のラグビーの動きを体験することができました。

動きだけでなく、背景に込められた思いを丁寧に教えていただき、ラグビーの魅力、そして選手たちの熱い思い、思いやりの心に触れる時間となりました。

ラグッパ体操の後は、身体も心もほぐれ…プレイルームはみんなの笑い声でいっぱい。

選手とともに目標を共有するコーナーでは、子どもも大人も自由にラグビーボール型の「トライシート」に目標を書き、カメラの前で発表をしました。

選手たちへの質問コーナーでは、スポーツ選手の視線からとても親

身にアドバイスをいただきました。

素直に湧き出る思いを伝えられる、そんな見えない糸が「ぷれいるーむ」と選手たちをつないでいるような…そんな和気あいあいとしたあたたかな空間が広がりました。

そして…選手たちからいただいた言葉、1つ1つが宝物となりました。

今日ここにいるみんなは「同じ時間を共有した『仲間』」

この言葉を大切に、共有した目標に向かってトライしていこう！イベント後はみんなが自然に集まって、目標を描いたトライシートを「ぷれいるーむ」に貼りました。



7月7日、大腸肛門外科フェロー 林 裕樹先生が第99回大腸癌研究会にて優秀演題賞を受賞しました！

本研究会は尼崎で開催され、ガイドライン・プロジェクト研究に携わる、非常に歴史がある研究会です。

毎回主題演題が定められ、全国の大腸癌の専門家が鎬を削る活発な研究会です。また、大腸癌領域では大腸肛門外科学会と並ぶ主要な研究会とされています。

主題に採択されることが非常に難関とされていますが、今回「Stage IVに対するR0手術の治療成績」に指導医の合田 良政先生、「虫垂腫瘍のすべて」に林 裕樹先生が採択されました。

「当科にて手術を施行した虫垂原発腹膜偽粘液腫120例の検討」を発表し、各主題の中から一演題のみに授与される優秀演題賞に林先生の演題が選ばれました。

今回の発表内容は、合田先生・矢野先生が施行してきた腹膜悪性疾患に対する真摯な臨床データの蓄積に基づいたものでした。ハイボリュームセンターならではの様々なテーマの中から、一つの重要な臨床データを発表し、研究会に認められたことは非常に栄誉あることです。

林先生は、「これもひとえに、指導医である合田先生および諸先生方のご指導の賜物であると、痛感しており、感謝申し上げます。今後も精進してまいります。」とコメントしました。



左：第99階大腸癌研究会 当番世話人 関西労災病院 副院長 村田 幸平先生
右：優秀演題賞を受賞した林先生

本号に掲載の集合写真等は、撮影時のみマスクを外しています。



企画・発行：
NCGM 広報企画室



https://www.ncgm.go.jp/aboutus/FeeltheNCGM_Plus/index.html

バックナンバーはこちらからご覧いただけます。